

# 「学びへの意欲を高めるために」

奈良県教育委員会

## はじめに

平成 19・20・21 年度の全国学力・学習状況調査の調査結果から、本県の児童生徒は、「国語、算数・数学の成績は比較的よいが、国語や算数・数学が好きな子どもの割合は、全国に比べ低い。」「学校のきまりを守ることや、新聞やテレビのニュースなどへの関心が低く、ルールを守る規範意識や社会性に課題がある。」などのことが明らかになった。

県教育委員会では、本県の児童生徒に見られる課題解決に向け、平成 21 年度は、学力調査活用アクションプラン推進協議会を設置し、同協議会と連携を図って作成した「学力調査活用アクションプラン」に基づいて教科の学習が好きな子どもを増やすことを目指して、取組をスタートさせた。

課題解決には「R-PDCA」の検証改善サイクルに基づいて取り組むことが有効であり、このことは、平成 19 年度に作成した奈良県学校改善支援プランでも示してきた。

今年度、奈良県学校改善支援プランの追補版を作成し、3 年間の調査結果の経年比較と、そこから見られる課題、課題解決に向けた取組を提示した。

## I. 都道府県・指定都市教育委員会における取組

### 1. 事業内容について

#### (1) 事業概要

県教育委員会では、平成19年度の全国学力・学習状況調査の結果に基づき、「奈良県学校改善支援プラン」を策定し、県内のすべての小・中学校、教育委員会に向け、課題の改善に向けた具体的な方策を示し、取組を進めるよう指導するとともに支援を行った。

本事業においては、県教育委員会がアクションプラン推進校を 5 校指定するとともに推進校では、各校の課題改善に向けた協議を行うため、推進校校長、教員、設置市町村教育委員会事務局職員、県教育委員会事務局職員を構成員とする学力向上研究会を組織し、「奈良県学校改善支援プラン」を踏まえ、「学びへの意欲を高める」というテーマのもと、学習意欲の向上、授業改善・指導改善の具体的な取組について調査研究を行った。アクションプラン推進校には、指導主事等を派遣し、授業改善について具体的な指導を行った。

また、学識経験者、教育委員会事務局職員及び推進校代表等からなる「学力調査活用アクションプラン推進協議会」を設置し、全国学力・学習状況調査の結果を分析するとともに、各推進校の取組を検証し、指導助言を行うなど研究の推進に役立てるため、年間 4 回の協議会を開催した。本協議会における研究成果は学校改善支援プランの見直しに役立てるほか、学力向上フォーラムや保護者等を対象としたワークショップを開催して研究成果の周知を図った。

#### (2) 実施体制

県教育委員会では、学識経験者、教育委員会事務局職員等からなる「学力調査活用アクションプラン推進協議会」を設置し、全国学力・学習状況調査の結果を分析するとともに、各推進校の取組を検証し、指導助言を行うなど研究の推進に役立てるため、年間 4 回の協議会を開催した。

#### (3) 研究成果

「学びへの意欲を高める」というテーマのもと、各推進校ではそれぞれの実態に応じた取組を行い、改善が図られている。

推進校の多くは基礎・基本の定着に主眼を置いて、繰り返し学習や習熟度別指導、問題作成データベースの活用など児童生徒に対する指

導方法や授業形態の工夫を行った。さらに、積極的に授業公開を行ったり、模擬授業を行ったりすることで指導力の向上に努めた。

学校質問紙の結果から、本県では講師を招いた研修は盛んに行われているが、授業公開などは全国平均を下回っている。推進校においては授業研究が盛んに行われており、教員の指導力の向上が学習意欲の向上に寄与していることが明らかとなった。

しかし、基本的な生活習慣の確立、学習習慣の定着、規範意識の醸成といった本県の児童生徒に見られる大きな課題については、まだまだ改善の途中である。保護者や地域との連携を図った継続的な取組が必要である。

## 2. 普及啓発と今後の取組について

### (1) 成果の普及啓発に関する取組

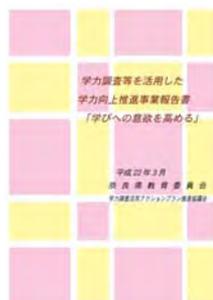
#### ① 学力向上フォーラムの開催

平成22年2月5日（金）、県立教育研究所にて「学びへの意欲を高める-授業の在り方をめぐって-」のテーマのもと学力向上フォーラムを開催し、



「学力向上フォーラム」より

県内小・中学校等から約200名の参加を得た。フォーラムでは、「平成21年度全国学力・学習状況調査の結果分析と課題解決への道筋」「実践発表」「シンポジウム」をその内容とした。また、本推進事業の取組の概要とその成果、学力向上フォーラムの記録等を掲載した報告書を作成し、県内各学校及び市町村教育委員会に配布し、普及啓発を行った。



「学力向上推進事業報告書」

#### ② 保護者等を対象としたワークショップ「ならっ子みんなでワクワク時間」の開催

保護者や地域住民に対する積極的な働きかけを行うため、地域の保護者はもちろん、地域の住民が集まるショッピングセンター等で、家庭教育の重要性



や地域ぐるみで子どもを育てることの重要性をテーマとしたワークショップを開催した。

具体的な内容としては、学力向上を図るうえで、基本的な生活習慣の確立や家庭における学習習慣を定着させることの大切さ、規範意識を身に付けることの大切さなどについて、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて、啓発するとともに、子どもが家庭で学習する際に保護者として取り組んでほしい望ましい接し方等を紹介するなどした。



「パネル展示」

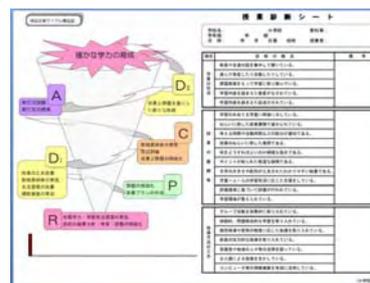
当日は、予想を上回る参加者があり、保護者から家庭での生活を見直すという感想が寄せられた。関連WEBページ <http://www.pref.nara.jp/secure/39251/narakko.pdf>

#### ③ 「奈良県教育の日」に関連した全県的なアピール

本県では、「教育に対する県民の意識や関心を高めるとともに、家庭、地域社会及び学校が、一層連携を深め、奈良県教育の充実と発展を図ること」を目的として平成15年に「奈良県教育の日」（毎年11月1日）を制定し、全県的に公開授業の実施や教育に関する講演会など様々な取組を行っている。昨年度は、全国学力・学習状況調査の調査結果から見られた本県児童生徒の課題とその解決への道筋をテーマとして開催した。本年度は、課題解決のために県教育委員会として取り組んだ事業について報告を行った。

#### ④ 学校改善支援プラン追補版（平成21年度版）の作成

平成21年度全国学力・学習状況調査の結果をもとに、奈良県学校改善支援プランの改訂を行い、追補版として作成した。3年間の調査結果の経年比較と、そこから見られる課題、課題解決に向けた取組を提示し



た。

## (2) 来年度以降の取組

「学びへの意欲を高める」というテーマのもと、各推進校ではそれぞれの実態に応じた取組によって改善が図られている。

しかし、基本的な生活習慣の確立、学習習慣の定着、規範意識の醸成といった本県の児童生徒に見られる大きな課題については、まだまだ改善の途中である。保護者や地域との連携を図った継続的な取組が必要である。

## II. アクションプラン推進校における取組事例

### 取組事例①

「基礎基本の定着を図り、確かな学力の向上をめざす～分かる喜びを知り、自ら主体的に学ぼうとする子の育成～」

御所市立掖上小学校

### (1) 学校の状況について

本校は、児童数 175 名の小規模校である。平成 19 年度の全国学力・学習状況調査の結果をみると、全国平均より高いとされる奈良県平均に比べて、国語 A・B、算数 A・B とともに大きな較差がみられた。また、朝食の摂取率が低い、就寝時間が遅いなど、基本的な生活習慣や家庭学習の習慣化に課題が見られた。

そこで、平成 20 年度「学力調査等を活用した学力向上推進事業」、平成 21 年度「学力調査活用アクションプラン推進事業」の推進校として取組を進めてきた。

1 年目の取組は、基礎学力の向上という点において、ほとんどの学年で一定の成果が見られた。それはまさに、全校を挙げての継続的な取組の成果であると考えられる。しかし、その一方で、少し難しい問題に直面した時に「自ら考えよう」としない、「すぐにあきらめてしまう」といった児童の実態や、「朝食を摂らずに登校する」「就寝時間が遅い」といった基本的な生活習慣の課題が見られ、その改善には家庭の支援、協力を得ることが不可欠であると考えられる。

### (2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

#### ① 教師の指導力を高めるための取組(授業力向上研究部)

- ア. 各学年の推進計画を立てる。
- イ. 研究授業を通して学び合う。
  - a. 低・中・高学年それぞれ 1 学級で講師を招いた研究授業の実施。
  - b. 授業公開週間を設けて、それぞれの授業を研究。
  - c. 算数科において、各学年とも年間指導計画の見直しを行い、新たに計画を作成。
  - e. 各種研究会、研修会への積極的な参加。
  - f. 教職員の授業力を高めるための講師を招いた研修

#### ② 基礎基本の充実を図る取組(基礎学力研究部)

- ア. 「すずかけタイム」(業前学習)を活用した、読書・漢字の書き取り・四則計算などの日常継続的な取組の充実。
- イ. 個に応じた学習に対応した問題データベースの導入。

〈活用例〉

- a. 各単元の「ドリルプリント」を家庭学習にして取り組ませる。
- b. 各単元の「ドリルプリント」「フォローアッププリント」「たしかめプリント」「チャレンジプリント」に各自の習熟度に合わせて取り組ませる。
- c. 単元テスト前に、各児童に応じて、弱かった問題を作り替えて重点的に取り組ませる。
- ウ. 教室・校内環境の整備(「読書の木」「読書カード」「話し方の基本話型」)
- エ. 算数チャレンジタイムの実施。
  - a. 毎週火曜日放課後、算数科に課題をもつ児童を対象に行う。
  - b. 対象児童については、保護者に主旨を説明し、理解を得る。
  - c. 学習内容については、各学級担任が児童に合った課題を設定し、指導する。
  - d. 算数に対する苦手意識の克服や分かる喜びを味わわせる。
- オ. 授業開始 10 分間で行う基礎学力の充実。

#### ③ 家庭学習を充実させる取組(家庭学習支援研究部)

- ア. 家庭学習についての実態アンケートを実施し、結果から課題克服の方法を考える。
- イ. 家庭学習の内容や量について全職員で共通理解を図る。

ウ. 保護者への啓発を図る。(低・中・高学年別にプリントを配布、定期家庭訪問、学級懇談等の機会を捉え

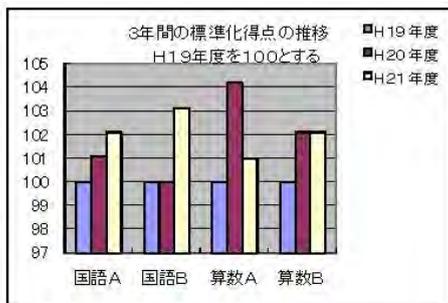
- a. 家庭学習の重要性に関する学校方針の説明
- b. 家庭における学習時間の確保
- c. 基本的な生活習慣確立についての呼びかけ(早寝早起き・朝食・ゲームの時間等)
- d. 月1回、一週間を通して家庭学習の状況の把握(保護者が生活記録表に記入)

### (3) 成果について

#### ① 全国・県との比較から見た学力

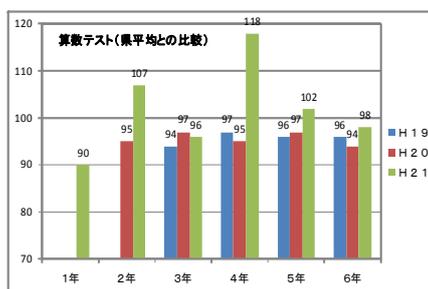
##### ア. 全国学力・学習状況調査結果

平成19年度の標準化得点を100とし、過去2年間の標準化得点を算出した。対象児童が異なるので一概には言えないが、概ね向上してきていると言える。



##### イ. 県学力診断テスト結果

算数科において、平成21年度は、平成19年度に比較してほとんどの学年で較差が縮まった。中には、県平均を上回る学年も出てきた。特に2年生、4年生では、県平均を大幅に上回った。



#### ② 家庭への働きかけ

家庭学習支援の側面から保護者による生活記録表への記入など、児童の基本的な生活習慣の確立に向けた取組や家庭訪問などを通して、家庭学習の定着を図ってきた。家庭学習への保護者の支援については、まだまだ課題が見られるが、「家で学校の宿題をする

よう促している」点や、「学習後の時間割をさせている」点などで、関心が高まってきている。

#### (4) 来年度以降の課題について

授業力向上、基礎学力向上、家庭学習支援という三つの柱を立て、取組を進めてきた。授業研究や、講師を招いてのスキルアップに取り組む中、教職員の指導力は着実に向上している。また、個に応じたきめ細かな指導を繰り返し行う中で、児童の基礎学力は向上してきていると考える。しかしながら、日々の取組の中で、「読解力」「思考力」「活用力」の弱さが感じられる。基礎学力をさらに定着させ、これらの力を育むための学習指導の在り方や授業展開の工夫をさらに研究し、推進していかなければならない。

さらに、「基本的な生活習慣」「学習習慣」の確立において、家庭の支援を得られるように、保護者への働きかけや連携を強化していかなければならない。

#### 取組事例②

「学ぶ楽しさや分かる喜びを子どもたちに～生活を見直して～」

平群町立平群西小学校

#### (1) 学校の状況について

本校は児童数120名、全学年単学級の小規模校である。そのため児童の実態把握や新しい活動にも比較的取り組みやすかったと考える。昨今の全国学力・学習状況調査の結果から、本校児童の次のような実態がわかってきた。国語、算数の正答率が低い、テレビ視聴や携帯・インターネットに費やす時間が多い、家庭学習・読書の時間が少ない、宿題をしない児童がいる、自尊心が低い、少し難しい問題に対して途中で諦めてしまう児童が多いこと等である。校内では、チャイム着席ができない、授業中立ち歩く等の行為も目立っていた。

このような状況を改善するため、学力、学習意欲、規範意識の向上、児童の基本的な生活習慣の確立に学校ぐるみで取り組んだ。そのため、校内の組織改革、授業改善並びに地域、家庭との連携強化のシステム構築を試みた。学力向上の具体的な取組について以下に述べていきたい。

#### (2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

- ① 基本的な生活習慣や学習規律の確立  
調査結果の数値分析…学力実態の把握  
 (教職員が学力向上のための取組の必要性を認識することからスタート)

生徒指導の取組…教職員の一致した指導、指導の困難な児童への複数対応、学年間の情報交換の重要性を全教職員で共通理解し、問題行動には学年の枠を越えて迅速に対応した。また、生徒指導部を強化し、部会の定例化も図った。

参観ウィーク(フリー参観)…保護者に、児童の様子をみていただき、指導に協力してもらうため、20年度は2週間、21年度は4日間、全日フリー参観を実施した。学校評議員・民生児童委員・幼保・中学校教員等にも参観を呼びかけた。

冊子「西っ子の学校生活」「家庭学習の手引き」の配布…先進校視察時の資料を参考に作成。家庭訪問時に各家庭に配布した。

学校での過ごし方や持ち物、家庭での過ごし方について保護者に確実に知ってもらい、家庭と協力し合って基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせることをねらいとした。



「家庭学習の手引き」

- ② 基礎学力向上に向けて一学ぶことが楽しく、分かる授業づくり

○朝学習・・・15分間、読書・計算問題(百マス計算)・漢字練習などに取り組む。

- あすなろタイム・・・金曜6校時に、4年～6年対象に算数、国語の少人数指導  
 ○夏休み学習教室・・・プール開放日に、希望者を対象に1学期の復習を行った。  
 ○校内研究・・・教員を相手にした模擬授業を行い、分かる授業を研究した。  
 ○ゲストティーチャーの招へい  
 ○中学校教員による出前授業・・・6年生対象



「ゲストティーチャーの授業風景」

- ③ 自尊感情を高める取組

○「ようこそ先輩」

各分野で活躍している卒業生を紹介する取組である。新聞記事を掲示したり、実際に本校でピアノ演奏等をしてもらったりする取組を通して母校への誇りをもたせることをねらった。

○奉仕活動や委員会活動の活性化

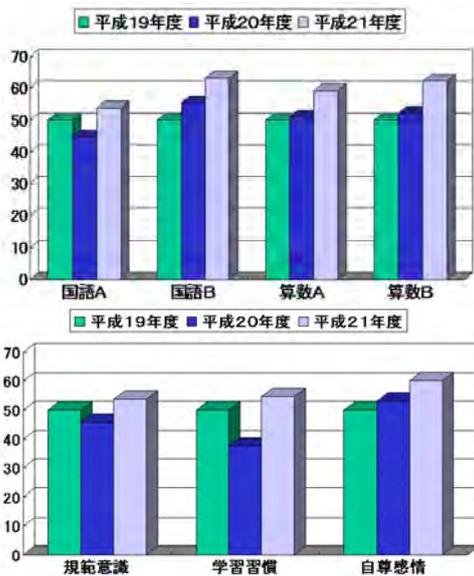
奉仕活動や委員会活動の作業をやり遂げた達成感や周囲に認められる喜びを味わわせ、「がんばること」の大切さを学ばせた。

(3) 成果について

- ・チャイム着席の定着
- ・「聞く態度」の向上
- ・忘れ物の減少
- ・宿題提出率の向上
- ・漢字の理解度の向上

などが挙げられる。下のグラフは本校の全国学力・学習状況調査の推移を表したものである。

国語、算数の正答率、規範意識、自尊感情の上昇が見てとれる。2月に再度同一用紙で6年生の児童に調査を実施したところ、4月に比べ無回答率も減少したことが分かった。

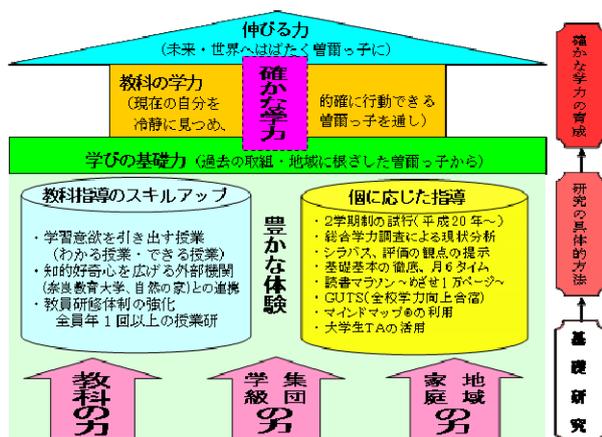


#### (4) 来年度以降の課題について

減少したとはいえ、無解答の多い児童が変わらずいる。不登校気味や、教室に入りにくい児童にその傾向が見られる。また、学力の二極化も見られる。家庭や地域との連携、学習意欲を高める授業づくりの取組はもちろん継続するが、それに加えて、児童の社会性、コミュニケーションスキルの向上、集団としての質の向上を目指す取組も組織的に進めていきたい。

#### 取組事例③

「2学期制試行、2年目の深化」  
～小規模校のメリットを活かした取組～  
曾爾村立曾爾中学校



曾爾中学校学力向上構想図

#### (1) 学校の状況について

本校は全校生 39 人(平成 21 年度)、山間へき地の小規模校である。概ね生徒は素直で自己責

任などの意識は高いものの、「数学の授業は好きですか」「自分には、よいところがあると思いますか」「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか」等の問いに否定的に答える生徒が多い(平成 21 年度全国学力・学習状況調査による)。また、調査の「数学A(主に知識力)」にも課題が見られた。そこで、基礎学力を定着させるために宿題や補習を課したり、コミュニケーション力を向上させるために見聞や実感を伴うような体験を多くさせたりすることでその解決を図ろうと、全校体制で取組を進めた。

#### (2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

- 本校では、平成 17 年度より始まった奈良教育大学の先導理数プロジェクト(新世代を先導する理数科教員養成プログラム)との「サマースクール(夏休み中の4日間)」や「ウィンタースクール(3月中の1日)」による連携の中で、大学生や大学教員との交流を続けることにより、学習への興味関心を喚起するとともに、コミュニケーション力の向上を期待している。
- 授業時数の確保に向け、平成 20 年度から二学期制を試行している。比較的ゆとりのある 12 月に村内の国立曾爾青少年自然の家で「第 2 回全校学力向上合宿(通称 GUTS)」(二泊三日)を実施した。
- 「数学A」の問題を再度受験(平成 22 年 1 月)させるとともに、学習意欲の変化も調べた。
- 「分かる授業」を目指し、全教員が年 1 回以上の研究授業を実施し、指導主事の指導を受けた。月曜 6 限を「月 6 タイム」と名付け、全校生が多目的室・図書室に集まり、自主学習を行う。「学び方」を学ぶ時間と位置付け、学習進度や理解度に応じて WEB ページから問題シートをダウンロードする「問題データベース」を利用し、長期休業中や GUTS で復習するなど、基礎学力の定着に努めた。



「月 6 タイム」

### (3) 成果について

① サマースクールやウィンタースクールでは、数学や理科の実験、体験活動などを通して、より一層の学力向上をめざし、計画的・継続的な取組を実施している。平成21年度の夏にはスルメイカの解剖を行い、消化管や「青い血液」を観察した。

年度末の学校評価アンケートで8割以上の生徒が「大学生との交流は楽しかった」と、肯定的に答えている。



「大学生 TA も交え学力向上支援」 「ラップ上でイカの解剖」

② 二学期制により、始業式・終業式や定期テストの回数減等により、授業時数は年間約20時間増加した。また、5月末に「確認テスト」と称して単元末テストを五教科同一日に設定した。増えた時間は、授業やマインドマップ講習会(7月15日)等として活用した。



マインドマップで自分を表現(生徒作品)

全校学力向上合宿 (GUTS ≪ Gakuryoku Up Training in Soni の略 ≫) の目的は「学力を徹底して鍛え上げ、家庭学習の習慣化を図り、集中力や自律心、コミュニケーション力の向上を目指す」ことである。大学生7人の協力も得て、1日8時間の授業と早朝・夜の自主学習を行った。



数学 with 大学生



音読破「風の又三郎」



瞑想タイム

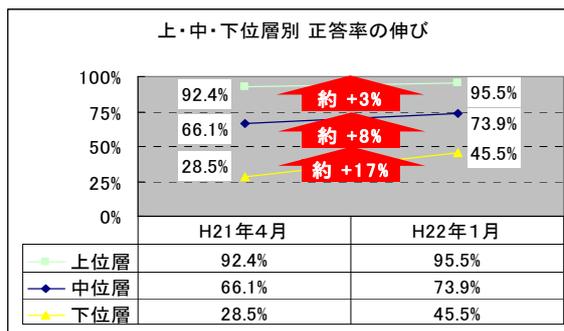


大学生「私の勉強法」

#### GUTS 後の生徒の感想より

- ・寒かったけど久しぶりに改めてゆっくり星を見て「本当にキレイやなあ」と見とれていました。(1年)
- ・3日間テレビもゲームも無い生活はいやだなと思ったけど思っていたより全部楽しかった。(2年)
- ・一人で勉強していると途中であきらめてしまい、長続きしないけれど、みんなで一緒に勉強すると3日間がアツという間に過ぎてしまい、分かなかった所も教えてもらって出来るようになった。(3年)

③ 全国学力・学習状況調査の「数学A」の問題を翌年1月に再度3年生に受験させると、次のような結果になった。



4月の正答率をもとに上位層・中位層・下位層に分け、1月の結果を見ると、上位層は+3%の伸びに留まったが、下位層は+17%の伸びとなった。中位層の伸びはその中間(+8%)であり、全体の平均正答率は、9.7ポイント上昇した。特に下位層の伸びが顕著だったことから、今回の取組が基礎学力の定着に役立ったと考える。

また、意識の変化(4月→翌2月)について、問いに肯定的に答えた生徒の割合は以下のものであった。

- ・「数学の授業が好きですか」: 3割→5割
- ・「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか」: 8割→ほぼ10割

### (4) 来年度以降の課題について

課題として、

- ① 意識の変化(4月→翌2月)で、「自分には良いところがあると思いますか」: 6

割→5割と悪化した。

- ② 「二学期制が曾爾中にとってプラスだった」と考える生徒は3分の1に留まり、「わからない」と答えた生徒も3分の1存在する。

二学期制については保護者もほぼ同様のアンケート結果であり、二学期制のメリットが十分に理解されていない現状がある。

平成22年度は二学期制試行最終年であり、村の広報誌や本校WEBページなども利用し、学校の取組を今以上に詳しく発信することによって、生徒・保護者への理解を深めながら、さらなる基礎学力の定着と自尊感情の醸成などに焦点を当てた取組を行いたい。